

太宰府の絵師調査事業広報誌

宰府画報

第 24 号

2024 年 10 月
(令和 6 年)

発行 市会課
宰府員財
教育文化



バックナンバーはこちらから

逸品探訪

鍾馗図

吉嗣 拜山 作



絹本著色 掛幅装 145.0 × 45.0cm
明治 30 年 (1897) 吉嗣家資料

す。多くの文人と交わり、蕪村とも面識があったようです。「怪異な形相で鼠のように鬼を食らうという鍾馗というが、そんなあなたはどうして唐の高宗や中宗の時代、また大暦建中の時代などに現れて、社会の不正や悪を退治してくれなかったのか」と、政治批判的な内容となっている。この詩は文化 9 年 (1812) に出版された茶山の詩集『黄葉夕陽村舍詩』に収録

中国・唐の玄宗皇帝の夢に現れ、邪鬼をはらって皇帝の病を治したという伝説に由来する鍾馗は、厄除けの神として中国であつく信仰され、日本でも古くから画像に描いたり、端午の節句に鍾馗の絵や人形を飾って子の成長や学業成就を願う風習があります。巨眼と長いひげ、黒い衣に身を包んで立つ姿、あるいは抜剣で邪鬼を退治しようとする姿にあらわされるのが通例ですが、本図では、鍾馗は左手に笏のようなものを持ち、本来退治されるべき邪鬼は、まるで従者のように鍾馗の剣を抱きかかえて控えています。真正面を向いて静かにこちらを見据える鍾馗の顔には一風変わった味わいがあります。

い、茶山の詩を借りて録す」とあり、拜山が謝春星すなわち与謝蕪村 (1716~84) の図にならって描き、菅茶山 (1748~1827) の漢詩を写し書いたものとわかります。与謝蕪村は池大雅と並び称される江戸時代中期の文人画家で、一般には軽妙な俳画で知られますが、和漢の様々な絵画に学んだ作品をのこしています。本作品と同じ図柄の作品は未確認ですが、吉嗣家資料には下写真のような模写図があつて、画面向かって右下には「謝春星写」との墨書があります。こちらにはごつごつとした山や岩の背景モチーフがあり、模写の原図はこのようなものであつたのだろうと推察されます。



吉嗣家資料中の模写

画賛末尾の識語に「明治卅年丁丑四月、謝春星の図意に仿

調査見聞

博物館実習授業での絵師調査への初参加

～太宰府で博物館学を学ぶ

地元大学との連携

太宰府の絵師調査事業は開始から10年、地道な調査を進めながら、報告書の発行、展覧会の実施、そしてこの『宰府画報』による普及活動を実施してきましたが、今年は新たな取り組みとして太宰府市にある筑紫女学園大学の博物館学芸員課程を履修する学生の学外実習として、調査に参加していただきました。

調査の対象としたのは吉嗣家資料のうち、工芸品類などの未調査資料です。煎茶会に使用した茶器類や作品制作に使用した絵具や顔料などを各自1点ずつ選び、資料の名称や大きさ、外観の特徴などを紙に記入してもらいます。文字が書かれたり刻まれている場合は解読して記さなければなりません。最後は写真撮影もおこない、普段見ることのない約百年前の貴重な資料をじっくり観察していました。

今回の調査結果は資料の基礎的な情報として整理し、今後の報告書作成や普及活動に役立てていきます。

(木村純也・太宰府市教育委員会)

美術作品調査の現場体験

今年の5月から7月にかけて、筑紫女学園大学文学部4年生の博物館学芸員課程履修生が、太宰府市文化ふれあい館で実施されている絵師調査に、授業の一環として初めて参加しました。

課程履修生27人は、4グループに分かれ、5月10日、6月12日・14日、7月12日に実施された絵師調査に参加しました。すでに学内授業で、歴史学や民俗学や美術史学の調査について、基本的知識に触れてきましたが、現場調査は多くの学生にとってほぼ初体験。



絵師調査の概要を真剣に聞く学生



調査風景

はじめに文化財課の木村さんと調査員の井形さんから、絵師調査の概要をお話いただき、その後いよいよ調査スタート。現在調査中の吉嗣家資料の道具類を対象とし、調書を作成し、写真撮影をしました。約百年前に絵師が使っていた道具類は、学生たちにとってはほとんど未知の物ばかり。おそろおそろ手に取り、しげしげ見つめ、いったい何なのか悩み、調書を作成しながら、少しずつ資料の意味を考えていくという作品調査の醍醐味を味わうことができました。



調査した湯瓶 (煎茶で湯を沸かすのに用いる道具) 吉嗣家資料

本学博物館学芸員課程では、毎年30名前後の学生が学んでいます。1年生より段階を踏んで授業を受け、4年生で近隣の博物館や美術館にて10日間程度の「館園実習」を受講するカリキュラムになっています。今回の太宰府市文化ふれあい館での調査体験は、通例の「館園実習」とは別に、太宰府市が行っている美術調査に1日だけ参加させていただくという企画でした。太宰府で博物館学を学ぶ学生たちにとって、地元文化を開拓する現場に立ち会わせていただけたことは、大変幸運だったと思います。この体験を踏まえ、今後それぞれの道を歩んでほしいと思います。

(小林知美・筑紫女学園大学)

いちまい

画稿鑑賞

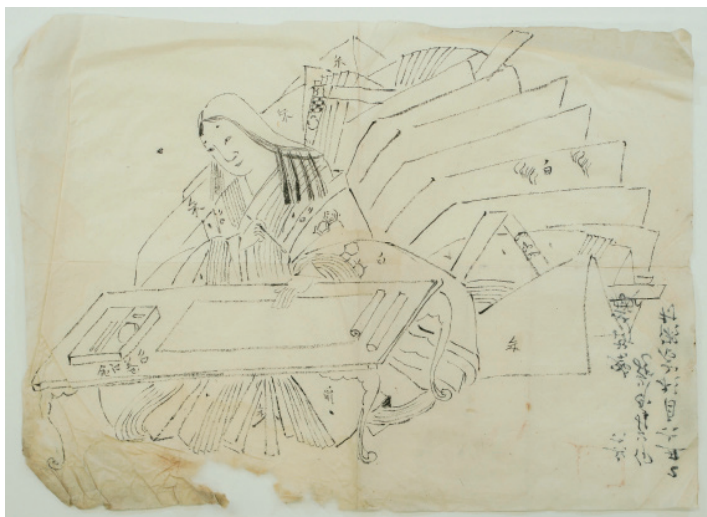
齋藤家資料

紫式部図

平安時代に『源氏物語』や『紫式部日記』を残したことで知られる紫式部は、後世に知られる人物として多くの絵師がその姿を描いています。紫式部を描いた最古の肖像とされるのが、紫式部が『源氏物語』の着想を得たとされる石山寺（滋賀県大津市）に伝わる「紫式部聖像」（室町時代）で、机を前に筆を手に取る紫式部が左向きに描かれます。この構図は紫式部を描く定型図の一種として、江戸時代の絵師による同様の構図の紫式部図が残っています。

齋藤家にもこの絵とよく似た構図の画稿が伝わっています。十二単と思しき装束を着た紫式部が筆を手に取り紙に何か書こうとしている様子が見て取れます。装束は「朱」「白」「クロ」「鼠」と色注があり、既存の作品を写したものだと考えられます。

裏面には「乙丑六月於岩瀬村／伊藤氏藏／兵六／葵所藏」とあり、齋藤秋圃と息子梅圃の生年から文化2年（1805）もしくは慶応元年（1865）



紙本墨画 27.0 × 37.8cm

に描いたものだと考えられます。「岩瀬村」は福岡県内だと遠賀郡と添田町にあつたようです。はつきりとした所在は不明ですが、村を訪れた伊藤氏所蔵の作品を見て模写したのかもしれない。（木村純也）

※「紫式部図」は太宰府市文化ふれあい館「太宰府歴史トピック展」にて展示中です。（令和6年12月22日まで）

メイショ
メイブツ

久我記念館の

「金鍍染付酒注」

宇美町を挟んで太宰府市の北に位置する須恵町。岳城山の山麓にある須恵町立美術センター久我記念館は、坂本繁二郎作品や九州のやきものなどをコレクションした久我五千男の私設美術館として建設され、氏の逝去後、作品と共に町に寄贈されました。

ここに常設展示されている須恵焼の作品に、吉岡拜山が書を施した「金鍍染付酒注」（須恵町指定文化財）があります。丸い胴に注口をもつ本作は鈍い金色に輝いています。これは金鍍と

書されたことが読み取れます。注口に向かって左側には、「明治己丑春日秋江写 鰻魚」という書とともに、鰻魚という中国に生息する魚が描かれています。絵を描いたのは村田秋江（1836～1890）。筑前で名の知れた絵師である師・村田東圃とともに、須恵焼の絵付けに関わっていたようです。

いって、近代の須恵焼に特徴的な釉薬です。胴の注口に向かって右の部分には、拜山により「故人相遇慰重游 况是絃歌有莫然 紫蟹黄花杯在手 歡娛話 舊越山穉 己丑春晚 併録舊作為 精一居士 拜山左手」という七言絶句と蟹の絵が描かれ、須恵村初代村長の田原精一のために明治22年（1889）に

須恵焼は、江戸時代中期に上須恵の地で生産が開始された磁器で、近世は福岡藩の御用窯として栄え、近代以降も民間で制作が続けられました。拜山と田原精一の交流の詳細は分かりませんが、他にも齋藤秋圃が絵付けを施した須恵焼があり、また、町の旧家には萱嶋秀山と拜山の合作の書画が残るなど、太宰府の絵師たちと須恵の地の関わりが深かったことは確かです。秋の行楽に、ぜひ久我記念館を訪れてみてください。（日野綾子）



《金鍍染付酒注》
画像提供:須恵町教育委員会



久我記念館外観

（日野綾子）

関係者
名鑑

Vol.4

孫士希

生没年 不明
関係者 吉嗣拜山

プロフィール

清・南京金陵の人という。字は謫人。明治9年(1876)、東本願寺が上海領事館内に設置した中国語学校の南京語教師。東本願寺上海別院にて日本人と交流した。

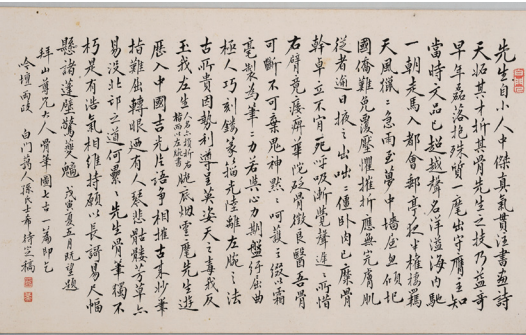
吉嗣家資料の中には清国文人の名も見え、拜山の交流の幅の広さが窺えます。その中に孫士希なる人物がいます。富が集中した上海租界を中心に活動した海上派文人の一人です。

孫士希は明治9年7月19日に東本願寺が上海領事館内に開いた語学学校の教師として雇われていて、同年8月20日の東本願寺上海別院の開院式にも参加したことが分かっています。また東本願寺の僧侶岡崎正鈍が明治11年5月22日に開いた宴席には上海県史官として出席しており、この時は上海県の役人になっていたと考えられます。この明治11年5月に拜山は清国に渡っており、孫士希との交流は「骨筆題詠」や「吉嗣拜山上書画」から窺えます。拜山の清国での活動の背景に東本願寺の存在があったことはよく知られていますが、孫士希との交流も東本願寺を

介したものとといえるでしょう。

その後、孫士希は日本に渡り、明治17年には長崎外国語学校清語学部で清国語の教員をしています。「吉嗣梅仙寿像贊」の贊は明治19年に書かれたものですが、おそらく孫士希が長崎にいた頃に書かれたものとなるでしょう。長崎時代の孫士希は中林梧竹とも交流を持っていました。

孫士希のように文人の中には官職を得ながら書画を嗜んでいる者が多くいました。拜山も怪我をしていなければ、公職に就きながら絵筆を握っていたことでしょう。(木本拓哉)



《骨筆題詠》部分
紙本墨書 卷子装 吉嗣家資料

ひとこと
くずし字

【遠塵】



仏教用語に「遠塵離苦」という、けがれから遠ざかり、煩惱から離れることを意味する言葉があります。文人という、ある意味俗世から離れ詩書画の世界で活動しようとする吉嗣家の人々も「遠塵離苦」の気持ちで作品を制作していたのでしょうか。

今回紹介するのは吉嗣家に伝わる「遠塵」と刻まれた印章です。「遠」は、左側の部首「辵」が「辵」と書かれています。現在使われる「辵」は「辵」が省略された字形です。「塵」という字は、あたかも「鹿」の角が「山」に突き刺さったような形状となっています。いづれも江戸時代に篆書体文字をまとめた書籍『印章貫珠』によく似た形の字が掲載されており、こうした書籍を参考に彫られたと考えられます。

この印章は側面に「其雲篆」と刻まれており、雨宮其雲という人物が製作したことが判明しています。其

雲は、篆刻家であり日本の印章学の基礎を築いたとされる中井敬所の門人のようです。来歴等の詳細は不明ですが、吉嗣家には同形状の水晶製の印章が他に2点存在し、「蘇道人」という吉嗣拜山の雅号を象った印章でもあるため、拜山と親交のある人物だと考えられます。(木村純也)



この資料

印面 2.3×1.2cm
総高 5.6cm
材質 水晶
作者 雨宮其雲
吉嗣家資料

編集後記

活発な交流がみられる吉嗣家の活動に負けず、現代の資料調査もいろんな組織の人と交流しながら進めています。(木)

暑い夏もようやく過ぎて、心地よい秋になりました。窓を開けて虫の声を聞きながら、文人趣味に思いをはせるこの頃です。(井)